下顎骨前歯部にみられた静止性骨空洞の1例

有家 巧・森田章介・郷 真奈武

大西祐一・福武洋二・岡野博郎

A case of static bone cavity in the anterior region of the mandible

Takumi ARIKA・Shosuke MORITA・Manabu Go

Yuichi OHNISHI・Yoji FUKUTAKE・Hakuro OKANO

Abstract: Static bone cavity is usually an asymptomatic lesion caused by localized bone defects of the lingual cortical bone in the posterior region of the mandible. It rarely occurs in the anterior part of the mandible.

Case report: A 24-year-old man was referred to us for examination of a cystic radiolucency in the anterior region of the mandible. The lesion was accidentally detected on a radiogram for dental examination. The radiogram revealed a well-defined unilocular radiolucency extending from the right canine to the left premolar region of the mandible. No resorption or divergency of the roots was observed. The teeth adjacent to the lesion were positive on electric pulp testing. An excisional biopsy was performed under a clinical diagnosis of a cyst or tumor in the mandible. We found salivary gland tissues in the mandible and a defect of the lingual cortical bone. The specimen was found to be normal sublingual salivary gland tissue on histological examination.

Key words: static bone cavity (静止性骨空洞), mandible (下顎骨), anterior region (前方部)

緒 言

静止性骨空洞は無症状に経過するため、歯科治療時のX線検査で偶然発見されることが多い。通常本疾患は下顎体後方に認められ、前歯部に発生することはまれである。今回われわれは下顎前歯部に生じた静止性骨空洞の1例を経験したので報告する。

症 例

患 者：24歳 男性。

初 診：平成5年1月■日

主 訴：なし（下顎前歯部の精査依頼）。

既往歴、家族歴：特記事項なし。

現病歴：歯科治療に際しX線検査を受けたところ、

大阪歯科大学口腔外科学第2講座

（主任：岡野博郎教授）

Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Osaka Dental University (Chief: Prof. Hakuro Okano)

受付日：平成8年3月21日

写真1 初診時のパノラマX線写真

3+4部に境界明瞭な楕円形の透過像が認められた。

下顎前歯部の嚢胞様透過像を発見され、精査目的にて紹介され来院した。

現 症：下顎前歯に異常は認められず、同部歯肉および歯槽粘膜は健康色を呈し、顎骨の膨隆も認められなかった。電気歯髓診断では3+4は生活歯であった。

X線学的所見：3+4に境界明瞭で、一部不規則

写真2 初診時の咬合型 X 線写真
骨吸収像は不明瞭であった(矢印)。

写真3 生検時の口腔内写真
多房性の組織塊(↓)が認められた。

写真4 生検標本の病理組織写真(H-E染色, 40倍)
粘液および漿液腺細胞からなる混合腺であった。

写真5 CT写真
舌側骨皮質は欠如し、透過像の辺縁は弧線状であった。

写真6 MRI (T1強調) 写真
舌下部の組織と連続し、顎下腺(*)と同等の中等度の信号領域を認めた。

な楕円形の X 線透過像を認めた(写真1)。歯根吸収や歯根離開はみられなかった。咬合型 X 線写真では骨吸収像は不明瞭であった(写真2)。

臨床診断：顎骨嚢胞あるいは菌原性腫瘍の疑い。

処置および経過：平成5年3月■, 全身麻酔下に出術を試みた。前歯部の唇側骨皮質を除去すると暗赤色で多房性の弾性軟の組織塊を認めた(写真3)。試験穿刺では内容液は認められなかった。組織塊は骨より容易に剥離でき、剥離を進めると舌側骨皮質の欠損を認め、組織塊は舌下部の組織と連続していた。なお骨欠損部の辺縁は平滑であった。組織塊は腺組織と考えられたが腫瘍も否定できず、検査のため組織を一部切除し手術を終えた。

病理組織学的所見：漿液および粘液腺細胞からなる混合腺で、漿液腺細胞が粘液腺細胞に隣接し半月形を呈する部(半月)が見られた。明らかに粘液腺細胞が多く線条部は不明瞭で、正常舌下腺と考えられた(写真4)。

手術所見および病理組織学的所見から静止性骨空洞と診断したが、患者の承諾を得て CT および MRI 検査を行った。

CT 所見：下顎前歯骨体部に弧線状の辺縁を有する

透過像がみられ、同部の舌側骨皮質は欠如していた(写真5)。

MRI 所見：T1強調像では、下顎前歯骨体部に舌下部の組織と連続し、顎下腺と同等の中等度の信号領域を認め(写真6)、同信号は Gd 造影像では濃染していた。T2強調像では骨髓信号を圧排する領域は高信号であった。

考 察

静止性骨空洞は X 線写真にて類円形の透過像として認められ、下顎体後方で下顎管の下方にみられることが多い。本疾患の発生頻度はパノラマ X 線写真での検索では 0.1~0.5%といわれている^{1, 2)}。大多数は下

顎角部から臼歯部で96%, 前歯, 犬歯部は4%と報告³⁾されているが, 論文発表された前歯部症例はわずか17例である⁴⁾.

本疾患の大きさは長径1~3cmのものが多く, 6+5部にわたる広範囲のものも報告されている⁵⁾. 下顎骨の前方部に生じたものでは, 2歯以内の大きさのものが13例, 3歯以上のものが5例と比較的小さな症例が多いが, 自験例は3+4部で7歯に及ぶ大きな病変であった.

本疾患は下顎骨の舌側が何らかの原因で陥凹することによるものであるが, 骨陥凹部にみられる内容物(以下, 内容物)としては腺組織が大部分を占め, 脂肪組織, 結合組織, リンパ組織, 筋肉などが認められることもある. 前方部症例の内容物は自験例を含め18例中15例が腺組織であった.

下顎体後方に生じた症例の診断には顎下腺造影が有用とされているが, オルソパントモグラフィでは撮影時の下顎位により顎下部の軟組織の位置が変化するため, 骨欠損部に一致して造影所見が得られないこともある. 一方, CTでは骨の陥凹状態の把握やCT値による内容物の推定, さらにCT-Sialographyでは骨欠損部と内容物の安静時での位置関係が3次的に再現でき, 小笠原は本法が臨床上きわめて有用であると述べている⁶⁾. しかし自験例のように舌下腺と関連して生じたものでは, 舌下腺を選択的に造影することは困難でCT-Sialographyの応用はできない. なお内容物の推定にはCTよりも, MRIの方が組織分解能が高く, 軟組織の性状を描写するのに適していると考えられる. 今回われわれは, 手術前に画像検査としてCTおよびMRI検査を施行すべきであったと反省している.

本疾患は一般に処置を必要とせず, 下顎後方に発生した典型例では経過観察のみ行われている. しかし

前歯部, 臼歯の根尖部, 下顎枝に発生したものや広範囲のものでは確定診断のため生検や手術がなされているものもある.

結 語

24歳男性の下顎前歯部に発生した静止性骨空洞を経験した. 病理組織検査により骨陥凹部の組織は舌下腺と診断された.

本論文の要旨は, 第36回大韓口腔顎顔面外科学会(平成7年4月, 大韓民国, Seoul市)にて発表した.

引 用 文 献

- 1) Oikarinen, V.J. and Julku, M.: An orthopantomographic study of developmental mandibular bone defects (Stafne's idiopathic bone cavities). *Int J Oral Surg* 3: 71-76 1974.
- 2) Correll, R.W., Jensen, J.L., et al.: Lingual cortical mandibular defects. *Oral Surg* 50: 287-291 1980.
- 3) 池本公亮, 石川武憲, 他: Stafne氏静止性骨空洞の2症例—病態と手術に関する考察—. *日口外誌* 35: 86-92 1989.
- 4) 若杉政則, 北川善政, 他: 5+3部にみられた静止性骨空洞の1例. *日口外誌* 37: 518-523 1991.
- 5) 川端泰三, 水野明夫, 他: 下顎骨前方部舌側にみられた静止性骨空洞類似の骨欠損の1例. *日口外誌* 29: 1966-1971 1983.
- 6) 小笠原利行, 石井保雄, 他: 静止性骨空洞の総合画像診断について. *日口外誌* 38: 1851-1858 1992.